しまね読進協

第48号

発行日　令和３年２月２８日

発行所 島根県図書館協会 読書推進運動協議会部会（松江市内中原町 52 番地　島根県立図書館内）

ホームページ　http://www.library.pref.shimane.lg.jp/?page_id=847

巻頭言

島根県図書館協会長
新谷 伊子

大切な人と過ごす時間や自由に旅することを我慢し、様々な規制を自身に課しながらの生活が未だ続いています。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、県内の公共図書館も一時的に休館するなど、これまでに経験したことのない対応を求められた一年でした。しかしそれは、いつでも自由に本を手に取ることのできる日常が、実は特別で、かけがえないものだったのだと知らされた時間でもありました。

不安のなか日々を過ごす人たちに寄り添う本を届けようと、それぞれの図書館が工夫を重ね、新たなサービスにも取り組んできたことはその証しです。私たちの役割を改めて問い直し、考える機会になったのではないかと思います。

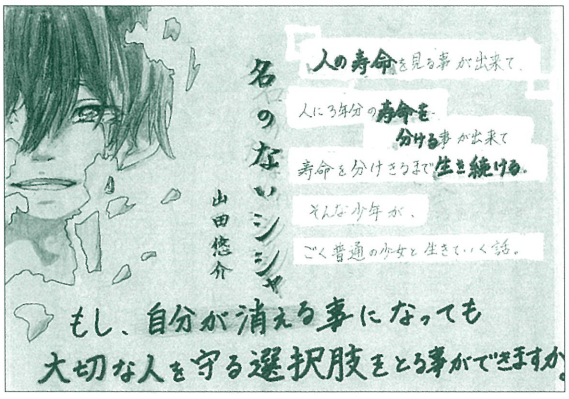
これからも続くであろう新たな日常の中で、私たちには、人と本をつなぐ「特別な時間」を作り続けていくことがより強く求められています。

令和二年度 島根県図書館協会活動報告

島根県図書館協会は、島根県内の公共図書館や大学・高等専門学校図書館、小中学校や高校などの学校図書館及び読書団体により構成される組織です。各団体が連携・協力し、図書館事業の振興と読書の普及及び文化の向上を目指して活動しています。

「この本いいよ！」の募集

島根県内の高校生・高専生からおすすめの本を紹介するコメントやイラストを募集しました。八十三点の応募があり、そのうち二十点は、本と一緒に県立図書館で展示しました。展示したすべての作品は、島根県図書館協会ホームページで公開しています。



『名のないシシャ』（山田悠介／著、KADOKAWA）を紹介する H.H さん（高校２年生）の作品

読書体験記の募集

県内在住者から読書に関する体験記・エッセイを募集しました。十三編の応募があり、うち三編を優秀作品に選定しました。優秀作品を当冊子で紹介しています。

読書功労者表彰

読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な個人と団体を表彰しています。

※今年度は表彰者・表彰団体がともにありませんでした。

優良読書グループの推薦

全国読書推進運動協議会に、優良読書グループとして、左記の団体を推薦しました。

◆**蔵木子ども読書会サクラマス教室**（吉賀町）

毎月第二土曜日の午前に、蔵木公民館で、テーマ読書会、スタッフによる読み聞かせや、大型紙しばいの製作などを行っています。

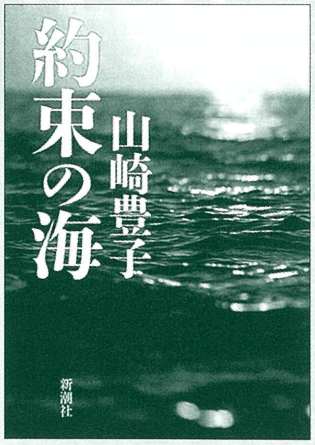
ほかにも、地域の話を聞いたり、地域の話が残っている場所への遠足、地域伝承の調理体験など、地元に根ざした活動を続けています。

読書体験記

県内から募集した読書体験記の中から、優秀作品三編を紹介します。

読書会での出会い

川瀬　喜美子（松江市）



『約束の海』
山崎豊子／著
新潮社

県立図書館主催の「成人読書会」に参加して四年半になる。幾つかのグループの中で一番の「超高齢者」グループに仲間入りをさせてもらったのは、人生の大先輩から読書を通じて学ぶことが多そうだと思ったからである。今は新メンバーも増えて多少平均年齢が下がっているものの、当時のメンバーはすでに九十歳に手が届く方々だった。しかし全員が、驚くほど独り暮らしの達人で読書に対しても確かな考えを持っておられた。

本の話だけでなく、世間話や昔話にも「おばあちゃんの知恵袋」的な身になるお話がいっぱいでいつも笑い声が絶えなかった。皆で課題にする本を選ぶ時も、既に読んだ本でも新入りの私が未読だと言うと「トシだからもう忘れてるからね」とユーモアを交えて選んで下さった。そして次の会に「やっぱり長生きはするものね。前に読んだ時とは面白さが全然違って新発見だったわよ」と仰っていた。常に前向きで知的好奇心旺盛な会話に、私はずいぶん刺激をもらった。

その内のお二人は高齢を理由に退かれたが、まだ九十代にはあと少しと言われるTさんは残られて、創設当時から三十数年の継続力には皆が舌を巻いていた。明るく朗らかで大らかな性格とちょっと天然（?）で楽しく、お世話好きな人柄を皆が慕い、尊敬していた。

そのTさんの突然の訃報を聞いたのは秋も深まろうかというある日だった。あまりの唐突さに咄嗟には信じられず、数々の思い出が押し寄せる。Tさんと最後に話し合った本は（そのときはもちろん、これが最後とは思うはずもなかったが……）山崎豊子さんの『約束の海』だった。

Tさんが書かれたこの作品の読後感のコピーを懐かしく読み返してみる。戦中世代だったTさんと戦後世代である私達とは根本的な思いは異なるだろうが、未完のまま二部三部が書けなかった山崎さんの無念を自分の事のように嘆いておられた。主人公の自衛官の苦悩と人間模様の巧みな描写に関しては当時の新聞記事の切り抜きまで添付されている。そこには、

日本を取り巻く海の中の隠れた防衛など、緊迫感を持って興味深く読んだ。そして今問題になっている自衛権について考えさせられた

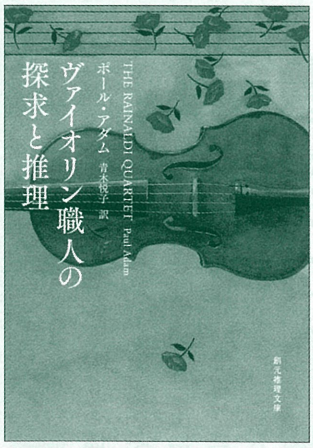
という短い文が残されていた。「若い人たちがこれから平和で安全な日本をどうしたら作っていけるのかしらね……」と語った、その時の真剣な口調と優しい眼差しが今でも忘れられない。

コロナ禍以前は読書以外の話題も盛り上がり、季節毎に各人の誕生会、お花見や忘年会やカラオケまで皆で楽しんだ。その思い出が今、走馬灯のように廻る。

これからも読書会で本を読むときには、傍らにTさんがいて下さると信じたい。そして「ここが面白かったわよ」という声を聞きながら共に感想を分かち合うことで、また一つ読書の愉しみをふやしつつ、読書会を永く続けていきたいと思っている。

本で旅する世界の国々

小松　由依（松江市）



『ヴァイオリン職人の探求と推理』
ポール・アダム／著、
青木 悦子／訳、東京創元社

私は図書館に来るとワクワクします。旅行前に、ホームで新幹線を待っているときや、空港で自分の乗る飛行機を目の前にしたときの、自然と気持ちが高ぶる感覚に似ています。図書館は、時代や国、言

葉の異なる本たちが一堂に会する不思議な場所です。私にとって図書館とは、別世界への入り口のようなものです。そして読書とは、旅の手段のひとつでもあると私は思います。

感染症の流行で海外への渡航が制限される今、私は特に海外文学を読む量が増えたように思います。外国を舞台にした文学作品を読むことで、その国に旅行しているような気分を味わうことができるのです。中でもポール・アダムの「ヴァイオリン職人シリーズ」は街並みの描写が細かく、登場人物たちと一緒にその街を歩いているような気分になれます。『ヴァイオリン職人の探求と推理』ではイギリスを、『ヴァイオリン職人と天才演奏家の秘密』ではフランスを、『ヴァイオリン職人と消えた北欧楽器』ではノルウェーを旅できます。自分が訪れたことのあるところが出てきたときにはそのときに思いを馳せ、まだ知らない土地が出てきたときには将来の旅の目的地に加えます。そうして、家や図書館にいながら海外旅行をするのです。

本を読んでその世界観に空想を巡らせる。これは私が幼いころから本を読むときにしている癖です。その癖は大人になった今でも変わらずあります。大掛かりな荷造りも移動も必要のない新しい旅行手段。それが私にとっての読書です。

さあ、今度はどこへ行こうか。そんなことを考えながら海外文学のコーナーを見てまわります。館内に並ぶ書棚は、まるで世界地図のよう。私は今日も、図書館の片隅でここではないどこかに思いを馳せるのです。

新たな自分

岩田和樹（松江工業高等学校）

『ライフトラベラー　人生の旅人』
喜多川 泰／著、
ディスカヴァー・トゥエンティワン

私は、ある本を読んで圧倒されました。その本が、新しい自分を探すきっかけになったのです。

それは『ライフトラベラー　人生の旅人』という本です。この本の主人公・知哉が旅に出る前に、友達の夏輝からアドバイスを受けます。そのアドバイスには、知哉だけでなく、私の人生をも変えるほどの力がありました。

夏輝は言います。

「0を1にするべきだ」

0を1にするとはどういうことなのでしょうか。この言葉自体はさまざまに解釈が可能でしょうが、夏輝が言う「0を1にする」というのは、「一歩を踏み出して、初めてのことを経験せよ」ということだったのです。

知哉は夏輝の言葉で、失敗をしないようにふるまうことが、実は最大の失敗であることに気付きます。私は初めてのことを経験するとき、いつもいつも、失敗しないようにと思って行動してきました。でも本当は、そのような行動そのものが失敗だったのです。失敗を恐れて挑戦しないならば、いつまで経っても新しい自分とは出会えないことでしょう。一歩を踏み出すかたちでの「初めて」ならば、たとえその場は失敗に終わっても、そこから学ぶことも必ずあるはずです。

もう一つ、強く記憶に残った言葉があります。

「ほんとうは経験だけが真の財産だって知っているからね」

一般に「財産」と聞いて思い浮かぶのは、お金とか家とかでしょうか。しかし、ある人間が経験したことは、他の誰かが経験したこととは違う、その人だけのものです。だからこそ、生きている一人ひとりの経験は、宝物のように大切なものだと思います。

そして、そういう財産があればあるほど、素敵な大人になれるのではないか、と私は考えました。

そのような財産をもっと増やすためには、もっともっと「0を1にする」作業が必要となるでしょう。情報を受け取るためのアンテナを常に張りめぐらし、何にでも取り組んでいきたいものです。

この本と出会って、さまざまな気付きを得ることができました。その気付きは、私が今後生きていくうえで役に立つことばかりです。でも、気付きを忘れず、役立てていくには、今、この時から行動しなければなりません。

この本から学んだことを目標として、日々新しい自分になっていけるよう、生きていきます。

令和二年度

島根県内の読書普及の主なトピック

新型コロナウイルスの影響

世界的な新型コロナウイルスの感染拡大は、島根県内の読書活動も多くの影響を及ぼしました。

県内での新型コロナウイルス感染者の確認や、令和二年四月～五月にかけての緊急事態宣言にあわせて、県内の多くの図書館が、休館や利用制限などの措置をとりました。

現在でも、返却された資料をアルコールで除菌したり、カウンターにアクリル板や透明なビニールカーテンを設置したりするなど、利用者と図書館員それぞれの安全を守るため、さまざまな感染症対策の取り組みが行われています。

並行して、外出自粛に伴って在宅で過ごす人々を支援するため、図書の貸出期間・冊数を増やしたり（県立図書館等）、郵送貸出を行ったり（海士町中央図書館等）、新たに図書セットの貸出を開始する（松江市立図書館等）など、利用者に本を届けるため、あらたなサービスを実施している図書館も多くあります。

書店や公民館図書室など、図書館以外の読書関連施設も、営業・運営時間を短縮するなど、大きな影響を受けています。

こどもの読書週間

「子どもの読書の日」から「こどもの日」を挟んだ二十日間（四月二十三日～五月十二日）は、公益社団法人日本読書推進運動協議会が主催する「こどもの読書週間」です。この期間中は、毎年、多くの図書館や公民館、学校などで、子どもの読書を盛り上げるため、さまざまなイベントが開催されます。

今年度のこどもの読書週間は、緊急事態宣言と重なったため、活動が大きく制限されました。読み聞かせやお楽しみ会などのイベントは軒並み中止となり、代わりに絵本や児童書の展示を行ったり（雲南市立大東図書館等）、おすすめの絵本をセットにして貸出する（出雲市立中央図書館、益田市立図書館等）などの方法で、子どもの読書を普及するための活動が行われました。

読書週間

毎年、文化の日の前後二週間（十月二十七日～十一月九日）は「読書週間」です。この期間中、全国の図書館など、読書に関する施設では、市民の読書を応援する取り組みが行われます。

当協会は、期間中に、高校生のおすすめ本を県立図書館内で展示したり、読書体験記の募集を行って、読書活動の普及に努めました。

「こどもの読書週間」と同じく、今年度の「読書週間」も新型コロナウイルスの影響を大きく受けることになりました。図書館まつりや講演会などのイベントも、新型コロナウイルスの対策を徹底した会場で行われたり（浜田市立中央図書館）、期間を例年より長くとって来場者が密集するのを避けたりする（江津市図書館）など、新型コロナウイルス感染症を警戒しながらの開催となりました。

ほかにも、市の学校給食課と図書館がコラボレーションして、絵本に登場する料理を学校給食で提供し、それに関連する本を館内で展示したり（松江市）、市内の図書館で読書週間の標語「ラストページまで駆け抜けて」にちなんだ本を展示する（出雲市）などの活動が行われました。

島根県図書館大会の延期

令和二年度に開催予定だった第1回島根県図書館大会は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、令和三年度に延期になりました。

全国高等学校ビブリオバトル2020 島根県大会

ビブリオバトルとは、一定のルールや制限時間の中で、オススメの本を紹介し合って、チャンプ本（一番読みたくなった本）を決定する「知的書評合戦」です。

令和二年十二月十二日に、島根県立大学浜田キャンパスで、「全国高等学校ビブリオバトル2020島根県大会」が開催されました。（主催：全国高等学校ビブリオバトル2020島根県大会実行委員会）

今年度の大会には、九名の高校生が発表者（バトラー）として、十一名の高校生が運営サポーターとして、それぞれ参加しました。

コロナ禍の中でしたが、熱い戦いが繰り広げられ、松江北高等学校二年の野尻愛結さんが紹介した『最後の秘境東京藝大』（二宮敦人著、新潮社）がチャンプ本に決定しました。